

# 保育内容研究IV(健康)における模擬保育の検討

Examination of simulated childcare in Content Research (Health)

中川 希望 (函館大谷短期大学) Nozomi Nakagawa

## 要 約

本研究は、保育士・幼稚園教諭免許の必修単位である保育内容研究IV「健康」における授業実践報告である。

保育内容研究IV「健康」では、幼児期における運動遊びの重要性や、指導・支援の在り方、環境設定について理解を深め、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法や保育実践の評価方法について学びを深めることを目的とした。

授業前半では、幼稚園教育要領・保育指針「健康」について理解を深め、後期では、教材づくり、模擬授業、授業後の評価をおこなった。そのような授業構成の中で、学生が記述した授業記録から考察し、保育内容研究IV「健康」における模擬保育の中でどのような学びがあったか授業記録から考察を行い報告する。

キーワード：保育内容研究IV(健康) 運動遊び 模擬保育 アクティブラーニング

## 1.はじめに

現在、科学技術の飛躍的な発展による生活の利便性の向上による体を動かす機会、家事手伝いなどの機会の減少や大人の子どもが体を動かす遊びをはじめとする身体活動の軽視が要因となり子どもの体力が低下している（文部科学省、2012）。

また、子どもの体力低下以外にも、その後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質・能力の育成の阻害に止まらず、意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすと指摘されており（幼児期運動指針策定委員会、2012），子どもを取り巻く環境の変化による子どもの育ちの変化が指摘してきた。

これらの背景を踏まえ、幼稚園教育要領の領域「健康」のねらいでは、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うこととし、様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つよう保育者が支援することが求められている（文部科学省、2018）。

他方で、実際での保育現場では若い保育者が遊びの経験が少なく、遊び方を知らない、といった問題や、運動遊びの指導が表面的、形式的、通り一遍等であるために遊びが深まらないといった経験の浅い保育者の指導力に関する問題（池田、2015）が指摘されている。

これらを解決する一つに、保育者養成校において、保育内容「健康」や幼児体育の科目で模擬保育が行われてきた。例えば（櫻木、2016）は、保育内容研究「健康」の授業において、14項目の質問紙調査を

行い学生の気づき、遊びの経験が少ない学生にどのような学びの気づきがあるか記述を分析行った研究や、模擬保育における環境構成に関して着目して評価した研究である（坂口、2016）。また、実践を考える力を育成することを目的とした、教員養成校や保育者養成校で開講される科目における模擬授業の実践報告がなされている。

これらを踏まえ本研究では、保育内容研究IV「健康」における模擬保育を行い実践の中でどのような学びがあったのか授業記録から考察を行い報告する。

## 2. 方法

対 象： 対象者はこども学科を専攻し、保育内容研究IV「健康」を履修している65名を対象とした。

実 施 日：令和1年7月4日(木)～令和2年2月7日(金)

収集したデータ： 模擬授業前グループ指導案①、模擬授業後グループ指導案②、授業評価、自己評価、授業省察ワークシート

アンケート：令和2年1月31日(金)保育内容研究IV「健康」履修した65名のうち58名が回答し、回答率は89.2%であった。

倫理的配慮： 本研究を行うにあたっては、予め本研究の趣旨の説明を行った。その際、質問紙調査の結果が授業の成績に影響しないことに加えて、調査結果の公表の際には個人が特定されないと伝えた。

### 3. 授業展開とシラバス

表 1 保育内容研究IV「健康」シラバス

科目名	単位	年次	開講期	担当教員氏名			
保育内容研究IV【健康】	2	2	通年	中川 希望			
授業のねらいと到達目標	幼稚期における運動遊びの重要性や、指導・支援の在り方、環境設定について理解を深める。また、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法や保育実践の評価方法について学びを深めることを目的とする。						
授業の方法	主に講義形式で行う。また、プリントをもとに進め、講義内容に沿ったレポートを提出し理解度を確認する。さらに、授業後半では、知識をもとに指導案の作成・模擬授業を行う。						
予習・復習等及び必要時間(分)	配布プリントを読み込み、授業内容を理解すること。(20分程度) 指導案の作成・実践準備を行うこと。(3時間程度)						
履修条件	特にありません。						
<b>授業計画</b>							
1 ガイダンス	16	幼稚期の教育の基本①					
2 幼稚園教育要領の変遷	17	幼稚期の教育の基本②					
3 「健康」①	18	保育方法の基本① 環境を通して行う教育					
4 「健康」②	19	保育方法の基本② 遊びを通しての総合的な指導 「共同的な遊びの展開と援助」					
5 子どものこころの発達と運動遊び	20						
6 子どものからだの発達と運動遊び	21	模擬指導案作成①					
7 子どもを取り巻く環境と健康	22	模擬指導案作成②					
8 基本的生活習慣	23	模擬指導案作成③					
9 あそび①	24	模擬授業①					
10 あそび②	25	模擬授業②					
11 安全管理と安全教育の必要性	26	模擬授業③					
12 保育計画と指導案	27	模擬授業④					
13 保育計画と指導案の作成	28	模擬授業⑤(評価・振り返り)					
14 保育・幼児教育における評価	29	報機器の活用と課題「視聴覚機材の活用方法」					
15 事例を通して学ぶ(グループワークと発表)	30	小学校との連携「学びの連続性と連携」					
教科書・参考文献	参考資料等 幼児教育指導方法 放送大学教育振興会						
課題(レポート・テストを含む)に対するフィードバックの方法	単元ごとのレポートの内容についてフィードバックを行う。また、単元ごとの講義の要点を再確認し理解を深める。						
学位授与の方針との関連	当該学科の学位授与の方針「」に該当する学科である。						
成績評価の方法及び単位認定の基準	レポート(20%)、授業内の課題(40%)、発表内容(40%)で評価する。						
実務経験と担当科目							

表 1 が示すように、前期では実践に必要な知識について学び、運動遊びについて指導案作成を行った。その後、各自作成した指導案についてグループで添削を行いアドバイス等おこなった後、再度指導案を作成した。後期では、1グループ6～8人でグループを形成し、運動遊び40分の模擬保育の指導案を作成した。また、模擬保育を行った際、授業に対しての他者評価、自己評価を行い、模擬保育の反省から指導案の修正を行った後、授業についての振り返りを行った。

表2 運動遊び指導案「リレー」

表3 運動遊び指導案「バナナ鬼」

表2、表3は、模擬授業の指導案である。指導案作成にあたり、幼児期の発育発達を幼稚園教育要領の第3章の第1指導計画作成に当たっての留意事項を踏まえ指導を行った。

## 4. 結果・考察

模擬授業を終えた受講者から収集したデータをもとに、授業展開の中でどのような学びがあったかについて考察を行う。

以下は、授業後に取ったアンケートの結果である。模擬保育の回数、遊びの経験、運動が好きか、幼少期の遊びの経験、運動遊びの実践と実践力の変容についての項目を5段階で評価した。また、運動遊びの実践と実践力変容について回答した理由を自由記述で回答を求めた。以下の結果がみられた。

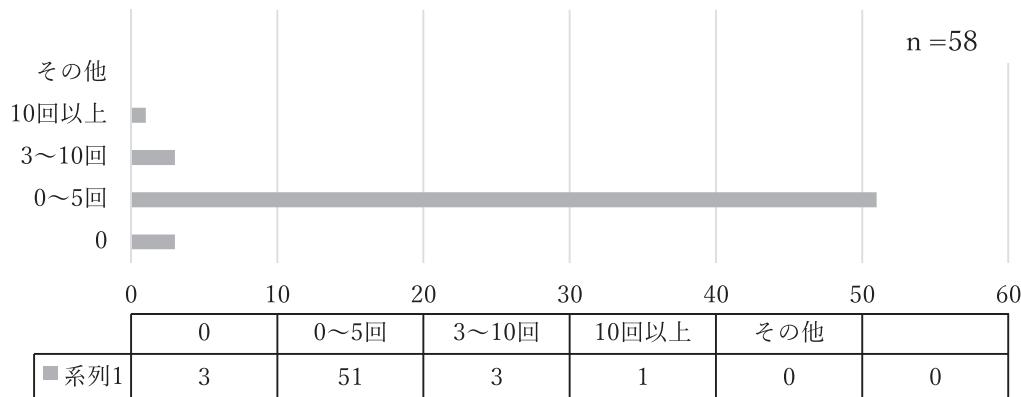


図1 運動遊びの設定保育経験回数

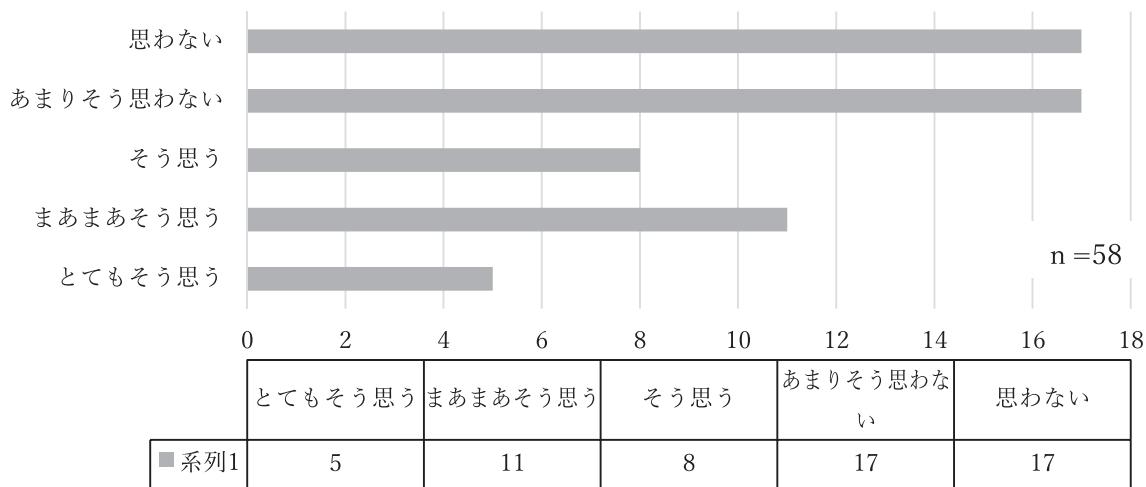


図2 身体を動かすことが好き

図1は運動遊びの模擬保育の経験回数を示したグラフである。保育実習、教育実習、講義等を含めた回数であり、0回3人(5.1%)、1～5回51人(78%)、5～10回3人(5.1%)であった。7割の学生が1～5回模擬保育を経験しており、また、身体を動かすことが好きかという問い合わせ、「とてもそう思う」5人(8.6%)、「まあまあそう思う」11人(18.9%)、「そう思う」8人(12%)、「あまりそう思わない」17人(29.3%)、「思わない」17人(29.3%)と回答し、身体を動かすことが苦手な学生は全体の34人(46.3%)が多い結果となつ

た。

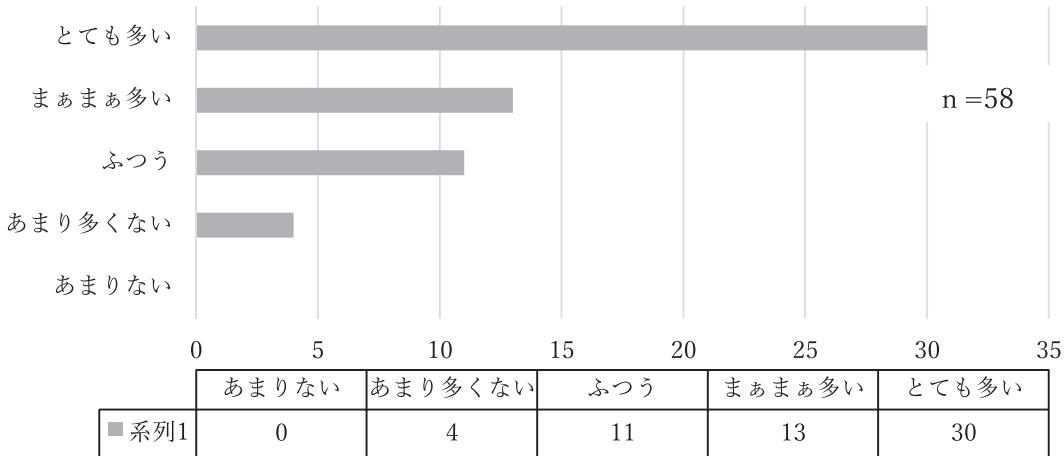


図3 子どもの頃の遊びの経験

図3は子どもの頃の遊びの経験について示したグラフである。遊びの経験が「とても多い」30人(51.7%),「まあまあ多い」13人(22.4%),「ふつう」11人(18.9%),「少ない」4人(6.9%)であり、子どもの頃の遊びを多く経験したと答えた学生が54人(93.1%)と9割の学生が遊びの経験は多く経験していたと回答した。図1, 2の結果から、幼少期の遊びの経験は多いが、運動遊びを行うことに苦手意識を持っている学生が多いことが分かる。



図4 設定保育を行い実践力につながったか

図4は模擬保育を行い実践力に繋がったかについて質問した結果である。実践が実践力に繋がったかについて、「とてもそう思う」21人(36.2%),「まあまあそう思う」22人(37.9%),「そう思う」14人(24.1%)であった。模擬保育について実践力に繋がったと肯定的に回答している学生が57人(98.2%)であり、9割の学生が、実践力がついたと実感していた。

それらを感じた理由について、自由記述で得られた具体的な記述を、記述内容と記載回数について下記に示した。

表3 省察内容と回数

省察内容	記載回数
グループ活動からの気づき	7
実践を通しての気づき	35
指導計画での気づき	2
他者の実践での気づき	6
対象年齢でない実践での難しさ	3
その他	3
合計	56

以下は、具体的な省察内容である。

〈グループ活動での気づき〉

- ・自分の考え方や行い方について気づくことができた。意見交換をしり、第三者の前で実践を行うことが勉強になった。保育現場でのチームワークが大切で何かあった時の対応についても学べた。
- ・みんなで一つのものをつくりあげるからこそいろんな意見が出てきて自分だけではできないことがたくさんあった。授業で使うものを作った時には先生になつたらこうすることをするのかと実感できた。
- ・私一人の考えだけでなくグループの人の意見を知ることができた。また他のグループの発表を見て初めに見たグループを見て指導方法方法を知ることができた。  
自分でねらいを決め発達段階に合わせて遊びを考えるのは大変だった。周りの人の意見を聞いて自分には考えがたくさんあって勉強になった。

〈実践を通しての気づき〉

- ・実習では運動遊びの模擬保育を避けてきていたので、授業で経験出来てとてもよかったです。
- ・実際に運動遊びを行うことによりその後の気づきや改善しなければいけないことがあり、今後につなげることができたから。
- ・年齢にあつた遊びを考え実際に実践を行ってみて、改善点がたくさん見えた。
- ・「できる」「できない」と思うことが意外と動けたり逆に難しかったりとやってみないとわからないことがあったため、保育をすることで気づけた。

〈指導計画での気づき〉

- ・子どもは日常的に運動遊びを行っており、保育士が援助し遊びを展開させるような行動をすることが大切だった。何をするかのいいか考えるのが楽しいとそう思えた。
- ・子どもの目線で計画を考えることができた。

〈他者の実践での気づき〉

- ・他の班の遊びを見ていらんなるものがあることが分かったから。
- ・いろんな班の遊びができてたくさんの遊びを知ることができた。

#### 〈対象年齢でない実践での難しさ〉

- ・今回経験したといつても 20 歳児相手に対してであった。
- ・設定する力は身につくが、対象が本当の 3 ~ 5 歳児ではなく 20 歳のためイメージしにくい。

#### 〈その他〉

- ・実習では運動遊びの模擬保育を行わなかった。専門職に就くつもりがあってもなくてもどちらでもよい。
- ・運動が得意だから。

模擬授業を通して実践力がついたと感じた理由について、〈グループ活動での気づき〉では、自分の考え方や行い方について気づくことができた。意見交換をし、第三者の前で実践を行うことが勉強になった。みんなで一つのものをつくりあげるからこそいろんな意見が出てきて自分だけではできないことがたくさんあったなど、意見交換をしながら指導案を作成していくことで、指導案の書き方、遊びの内容の深まりに繋がっていることが分かる。〈実践を通しての気づき〉では、記載数 35 回と一番多い記載が多い。実践を行ったことで、実習では運動遊びの模擬保育を避けていたが経験できてよかったという記述より、グループで模擬保育を行うため、運動遊びが苦手に感じる学生についても、模擬保育を経験でき実践でのイメージを持つことができたと考えられる。また、「できる」、「できない」と思うことが意外と動けたり逆に難しかったりとやってみないとわからないことがあったため、模擬授業することで気づけた。という記述から、模擬保育を行うことで実践の計画と実際の実践とのずれを模擬保育を行うことによって気づく機会に繋がっていた。

しかし、本研究の模擬保育の対象は学生であり、対象年齢でない実践での難しさについて、今回経験したといつても 20 歳児相手に対してであった。設定する力は身につくが、対象が本当の 3 ~ 5 歳児ではなく 20 歳のためイメージしにくい。などの記述から、実際の幼児の指導と異なる部分もあり、対象年齢でない難しさがある。

## 5. おわりに

本研究では、模擬保育を経験したことで実践力が身についてと感じる学生が多かった。その記述を考察すると、模擬保育を 1 人で行う場合より、グループを組み指導案作成・実践を行う過程で、他者意見を聞き話し合いを進めることで指導案の内容や実践を深めることができていた。特に指導案作成や運動遊びの実践に苦手意識がある場合には、一人で実践を考えた場合に内容が深まりにくい、そのため、グループ活動での意見交換から深められたと考えられる。

また、他者の実践を見ることで、自身の指導技術の振り返りや他者の良い所を見ることにより指導へのイメージが深まりに繋がっていた。

一方で、模擬授業の実践対象が学生であったことで、実践力は身につくが、実際の対象とのギャップがあるなど学生を園児に見立てた実践の限界もある。これらを踏まえ、実践を学生対象に行った後、模擬授業評価を行い、実践を再度検討し、実際に園で園児を対象に実践を行うことで、より実践力が身につく講義が展開できると考えられる。

## 参考文献

- ・櫻木真智子, 運動遊びを用いた模擬保育における学生の環境構成に関する一考察, 聖和短期大学紀要, 2016
- ・坂口翔太, 保育専門科目に実践を取り入れることによる学びの報告 -「保育内容・健康」に模擬保育形式の運動遊びを導入することの効果を導入することの効果を例として-, 聖徳大学研究紀要, 2016
- ・大石祥寛・倉岡豊美, 運動遊びの指導力に対する模擬保育実践の効果, 宮崎学園短期大学紀要, 2018
- ・桐川敦子・櫻木真智子・黒澤寿美・望月久也・森田陽子・染川悦美, 模擬保育形式の授業における学生体験 - 運動遊びの実践を通して -, 2018
- ・厚生労働省, 保育所保育指針解説, 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課, 2018
- ・文部科学省, 幼稚園教育要領解説, 2018